

近世やまと絵作品における公家らによる詞書等の資料的検討

(1) 土佐光起筆「大寺縁起」(開口神社蔵)

知 念 理

土佐派や住吉派などの近世やまと絵系作品は年紀を伴うものが非常に少ない。絵師の画風的な特徴変化、署名の官位や僧位、使用印、賛者の経歴などを総合して制作年代の推測に及ぶことを余儀なくされ、それぞれの絵師の基準作の見極めを遅れさせている。

こうした課題の克服に向けては、源氏絵、歌仙絵、社寺縁起絵など、同時代の公家らによる書跡が組合わされた画帖・画卷形式の作品を主要なターゲットに、等閑視されがちであった詞書、和歌の伝承筆者の妥当性を基準的筆跡に照らして検証することが有効だとし、一部の先学らによって研究がおこなわれてきた^①。寄合書の場合には、生没年や官位の相互関係から制作年代を相当短期間の中に絞り込める可能性があり、周辺史料と合わせて制作背景の推測にも及ぶ。とくに能筆として知られるわけではない、大多數の江戸時代公家らの基準的筆跡を網羅的に蓄積してゆく作業は、優れた鑑識眼と相当の根気強さを必要とするものだろうが、近世やまと絵研究における必須の工程として、継続的な取組みが求められることを稿者自身一層痛感するところである。

ここで取り上げる、重要文化財「大寺縁起」(全三巻、大阪・開

口神社蔵)は、全長七十メートル弱に及ぶ社寺縁起の大作で、土佐光起の最晩年(元禄三年／一六九〇〓七十四歳)の基準作である。神功皇后が外征の加護を祈願して塩土老翁神(住吉神と団体という)をこの地に祀ったとする開口神社のおこりと、聖武天皇の勅願によるという念仏寺(開口神社の神宮寺、通称大寺)創建の由来を僧行基の生涯の事跡にからめて説くほか、空海、空也ら高僧とのつながりにもふれ、念仏寺が格別な本地垂迹の地であることを強調する。

上述の詞書筆者同定の観点から重要視されるのが本作の下巻末の奥書で、制作時の純然たる詞書筆者目録がそこに含まれている。上巻五段、中巻十二段、下巻八段の詞書の配列に従って計二十五人の筆者(ほか外題筆者一人)の名が明らかにされる(53ページ【表】)。上巻・第一段詞書筆者である近衛基熙が「関白左大臣」であったのは奥書年紀の元禄三年十月をはさむ一年弱の間で、他の公家らの記載官位も当然ながら矛盾なく揃う(『公卿補任』ほかによる)。従来より「大寺縁起」の全詞書は、二十五人の執筆各人筆跡のゆるぎない基準例と認められているわけだが、筆跡の明確な認識、比較を前提にした図版掲載はこれまで行われていない^②。よって今回、後掲

【図2】の各図によりその全段の詞書(但し、各段冒頭から十行のみ)および外題を掲載して、近世やまと絵をはじめとする絵画史研究に向け広く参照活用されることを期するものである。⁽³⁾

蛇足ながら、筆者目録に続く奥書本文【図1-1】ほか関係史料についてこの機会にまとめておく。まず奥書筆者は高辻長量(一六六二—一九五)。当時は従四位上、式部権大輔、文章博士であったが執筆起用の理由は不明である。天正年間に失われた念仏寺縁起の再興のため、関白近衛基熙の命を受けた貴紳らにより詞書の調製がなされた経緯を簡潔に記す。年紀は元禄三年十月八日で、中巻・第二段の詞書筆者である烏丸光雄はその九日後に逝去する。施主・近衛基熙の日記『基熙公記』の同年十一月十五日には、完成した「泉州大寺縁起」を先ごろ堺に届けさせたこと、金子菓子等を持参し返礼に訪れた念仏寺多聞院の正秀と面会したことがみえる。また同日付で近衛家諸大夫の今大路光好(一六四四—一七〇九)から出された「近衛基熙御教書」により、本縁起の寄付が正式に下達されたことが知られる。⁽⁴⁾

そして平成二十四年から同二十六年にかけて行われた保存修理により、「大寺縁起」の本紙が裏打ちを施さない一枚の料紙による珍しい仕立てとなっていること、また軸首や表装裂、蒔絵保存箱も含めて、ほぼ制作当初の状態を一体的に保っていることなどが判明した。この修理から史料的には以下のような知見がえられている。

すなわち、三巻中、唯一まだ糊止めされていた中巻の軸巻が解体され、上、下巻と同様の「元禄三年十月十五日」の奥書(施入銘)【図1-2】が新たに確認された。さらに各巻の軸木に「元禄四年辛未二月吉日 経師長右衛門／長兵衛」の軸書【図1-3】が確認され

ている。⁽⁵⁾「大寺縁起」の絵と詞書は元禄三年十月十五日頃、堺に届いたのち、翌四年二月にその卷子装が整ったとひとまず理解される。施入後も「大寺縁起」を通じた念仏寺と近衛家のつながりは、上皇、天皇による縁起の天覧が恒例化することにより長らく幕末まで維持された。開口神社にはその関係文書も多く伝えられている。⁽⁶⁾

註

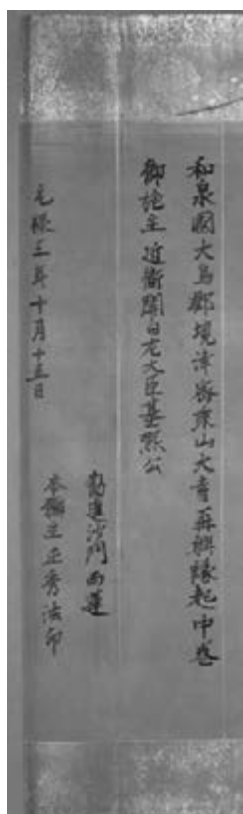
1 主要な論著を掲げる。松原茂「住吉具慶筆『徒然草画帖』—制作期とその背景—」、『MUSEUM』三八七号、一九八三年。同上「狩野探幽筆『新三十六歌仙図帖』の制作事情」、『水荃』二号、一九八七年。榎原悟「住吉派『源氏絵』解題—附諸本詞書—」、『サントリ—美術館論集』三号、一九八九年。『江戸名作画帖全集』土佐・住吉派 光則・光起・具慶、駿々堂出版株式会社、一九九三年。『江戸名作画帖全集』狩野派 探幽・守景・一蝶、駿々堂出版株式会社、一九九四年。遠藤栄子「東京国立博物館所蔵土佐光起筆十二月花鳥図巻の制作背景について—後水尾院との関係を中心に—」、『MUSEUM』六五七号、二〇一五年。

2 語書筆者の紹介は澤村専太郎「大寺縁起畫巻に就いて」(『国華』三二六号、一九一七年)が早い。また全巻を図版掲載する刊行物に、モノクロでは『社寺縁起絵』(奈良国立博物館、一九七五年)、カラーでは『大寺さん—信仰のかたちをたどる—』(堺市博物館、二〇一六年)がある。

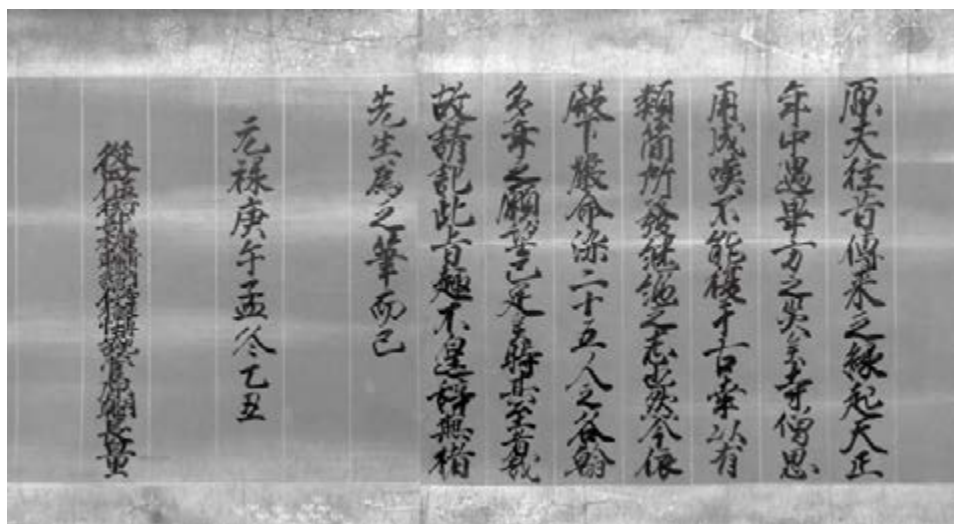
3 詞書翻刻は、『神道大系 神社編六 河内・和泉・摂津国』(神道大系編纂会、一九八一年)、『開口神社史料』(開口神社、一九七五年)を参照。

4 以上の史料に関する翻刻は、前掲註2『社寺縁起絵』、註3『開口神社史料』参照。

5 ところで、やはり近衛家諸大夫との接点を有する土佐派作品として「総持寺縁起絵巻」(享保奥書本、一卷、大阪・総持寺蔵)の存在が最近知られるところとなった。落款は確認できないが画風から土佐光成の筆とみてよい絵巻で、巻末には今大路光好の子・孝在(一六七二—一七三〇)による享保十二年(一七二七)の奥書がある。はじめ父・光好が基熙への協力斡旋を引受けて始まった詞書の調製が中断し、ようやく全段分を完備するにいたった経緯と、すでに故人となった四人を含む計九人の詞書筆者(ほか外題筆者一人)が記される。『総持寺』(茨木市立文化財資



【図1-2】



【図1-1】



【図1-3】

6

前掲註2『大寺さん』、註3『開口神社史料』参照。

5

料館、二〇一八年）所収、No.21図版（奥書まで全巻掲載）と作品解説、及び桑野梓「総持寺の歴史と美術」参照。光好とその子・孝在の動向に關しては、緑川明憲『豫楽院鑑 近衛家熙公年譜』（勉誠出版、二〇二二年）に詳しい。

なお、緑川『同書』は「補陀落山総持寺の縁起」の近衛家熙による詞書染筆を立項している。ただし本絵巻の現物ではなく、近衛家菩提寺のひとつである西王寺伝来の記録類に含まれる孝在奥書の写しとみられる部分から引かれたものであるが、元禄十二年（一六九九）詞書筆者のひとり愛宕通福の没年）九月八日以前という時限の解釈は、本縁起の詞書調製の中断が考慮されておらず、奥書の享保十二年当時すでに故人の通福ら四人以外の染筆者に対しては一樣にあてはまらない点注意されたい。



【図2-1】上巻・第一段 近衛基熙



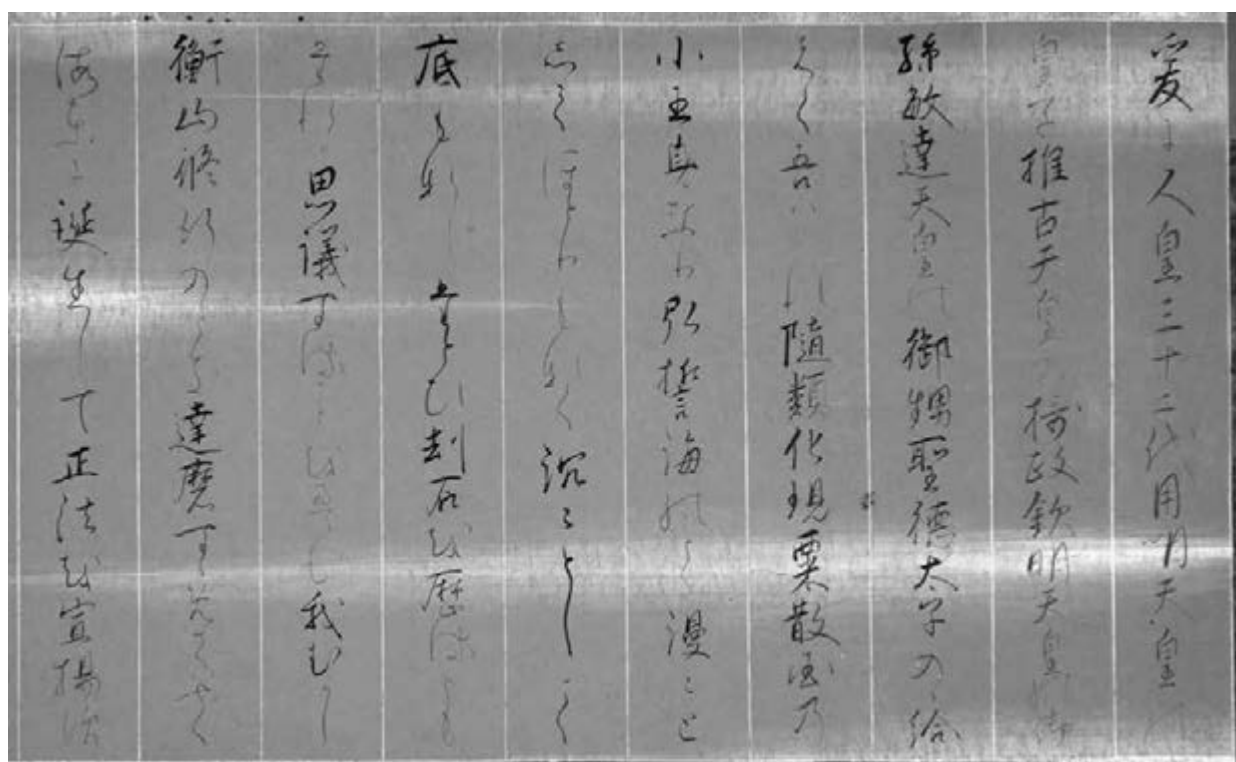
【図2-2】上巻・第二段 中御門資熙



【図2-3】上巻・第三段 今出川伊季



【図2-4】上巻・第四段 竹内惟庸



【図2-5】上巻・第五段 妙法院宮寛恕法親王



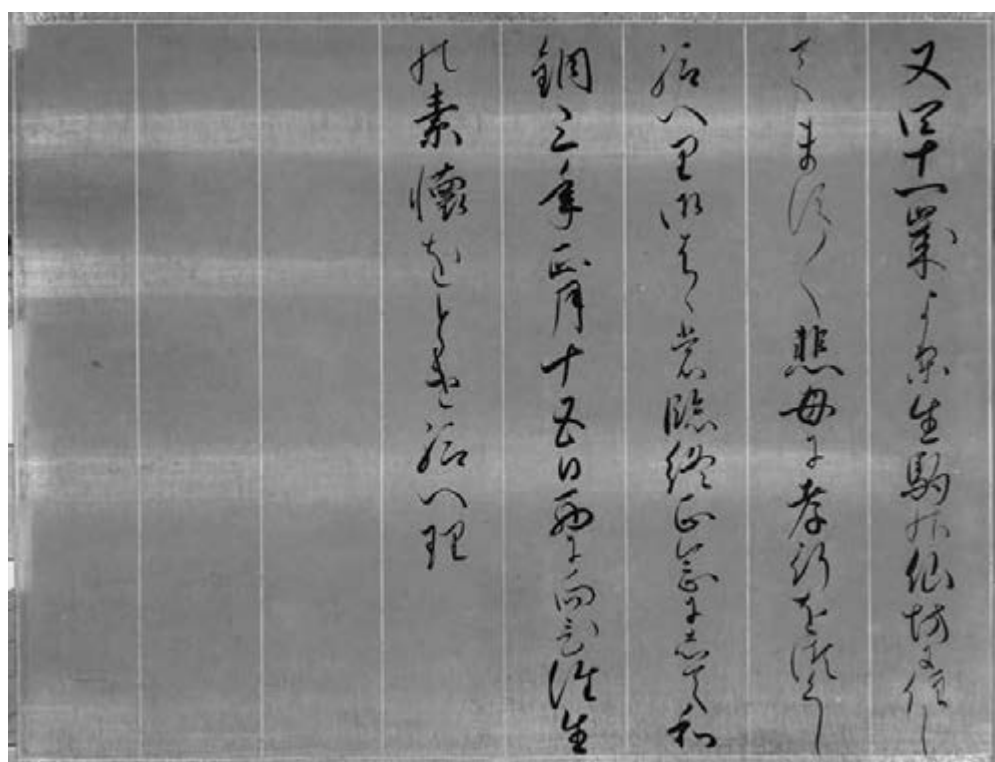
【図2-6】中巻・第一段 鷹司兼熙



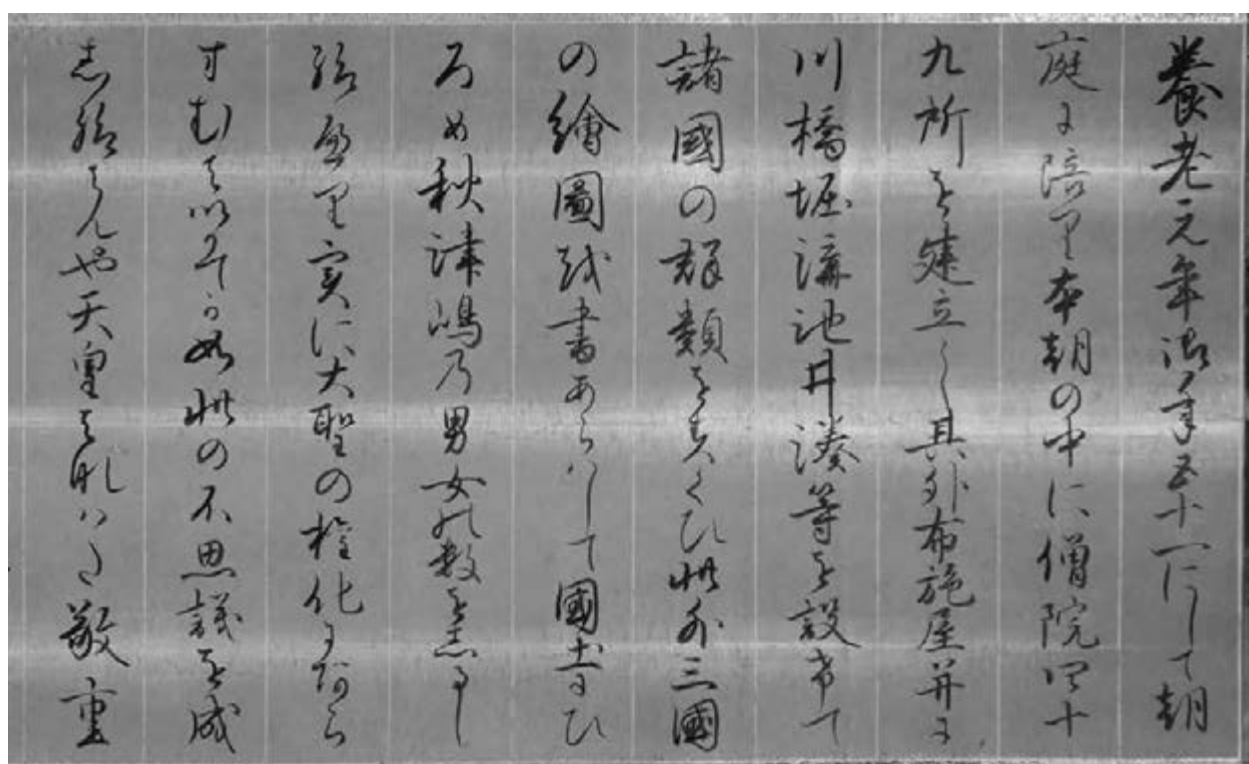
【図 2 - 7】 中巻・第二段 烏丸光雄



【図 2 - 8】 中巻・第三段 風早実種



【図 2-11】 中巻・第六段 穂波経尚



【図 2-12】 中巻・第七段 萩原員従



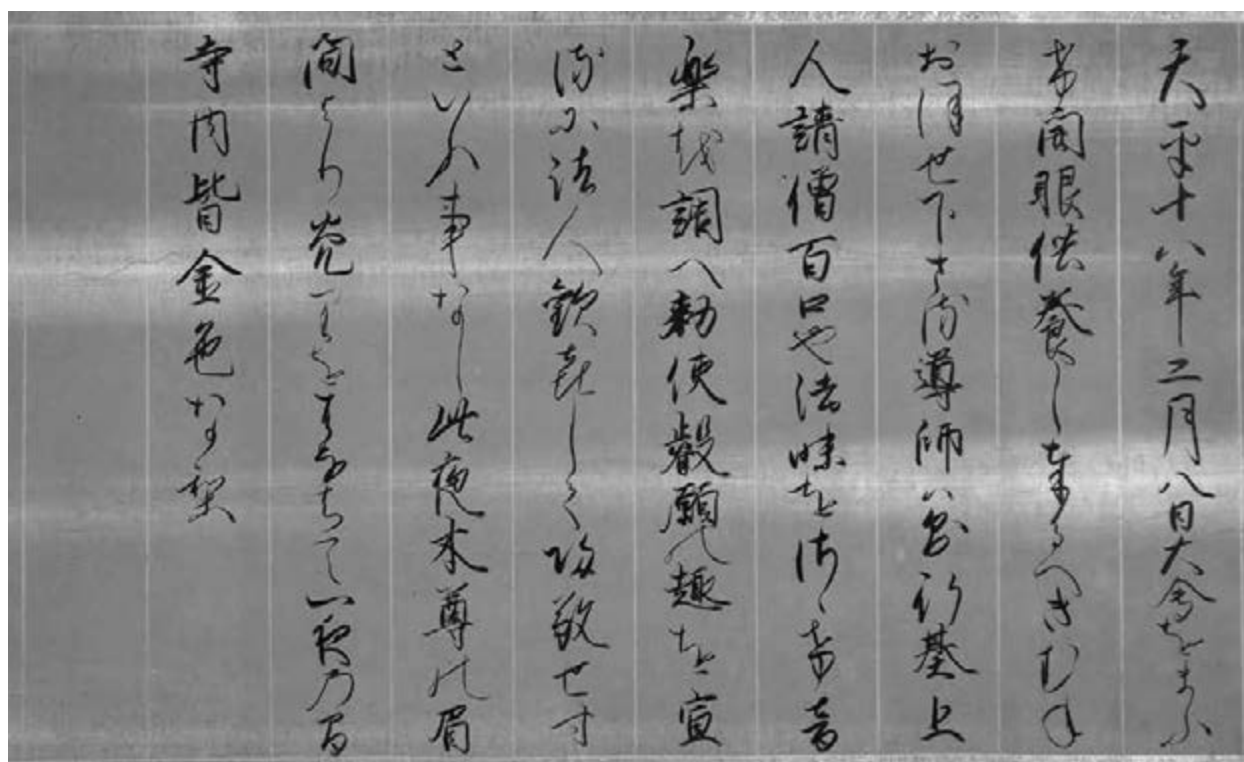
【図 2-13】 中巻・第八段 高野保春



【図 2-14】 中巻・第九段 平松時方



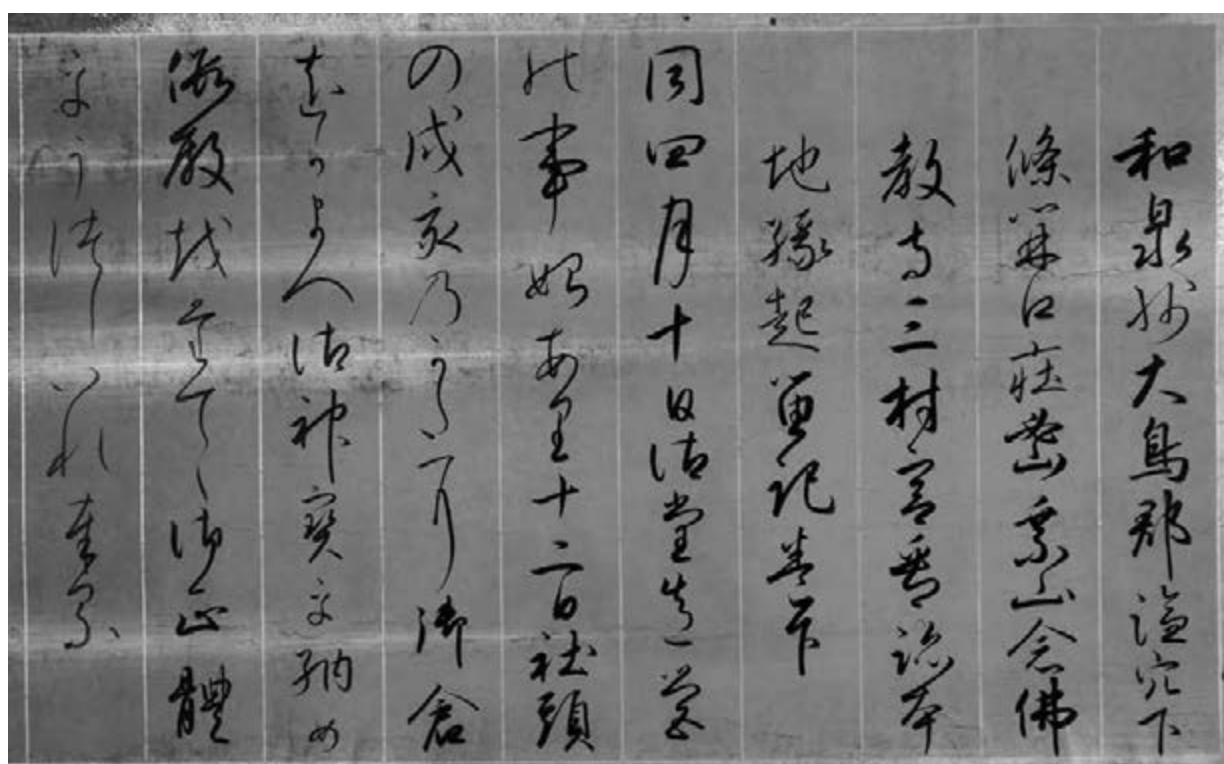
【図2-15】中巻・第十段 飛鳥井雅豊



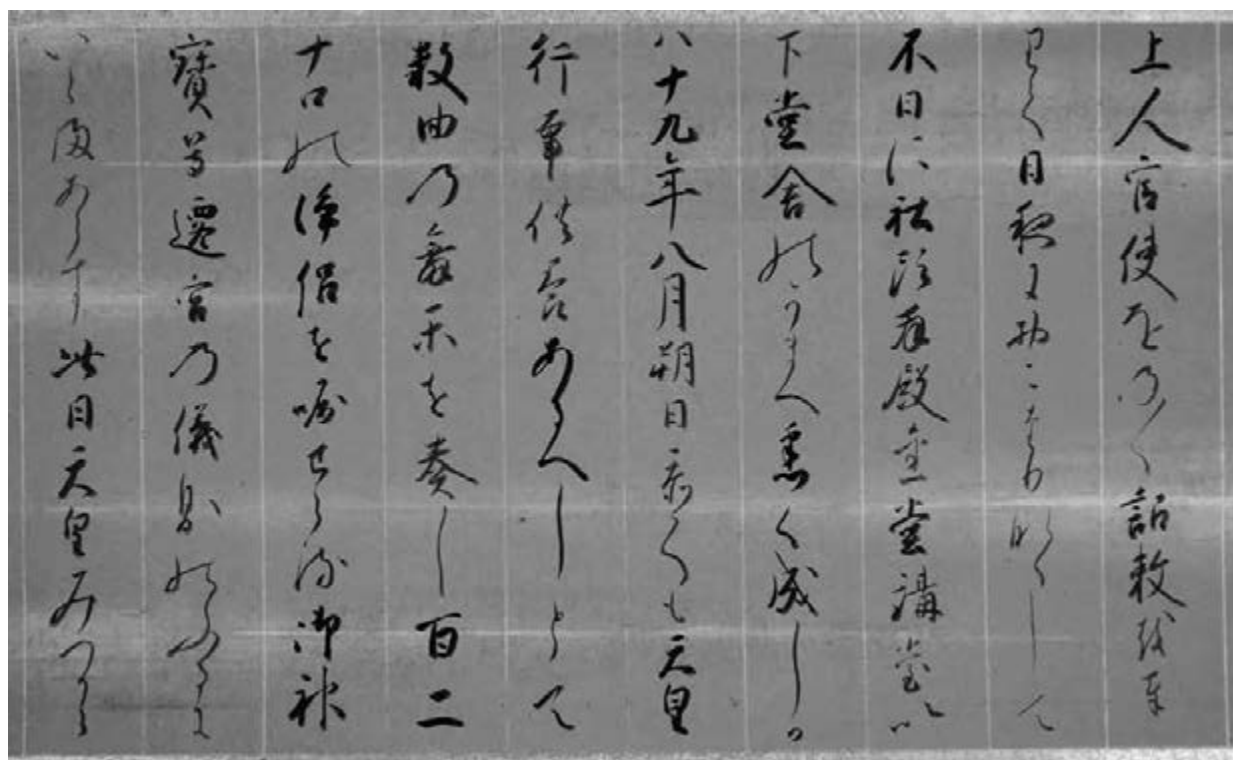
【図2-16】中巻・第十一段 竹屋光忠



【図2-17】中巻・第十二段 青蓮院宮尊證法親王



【図2-18】下巻・第一段 近衛家熙



【図2-19】下巻・第二段 甘露寺方長



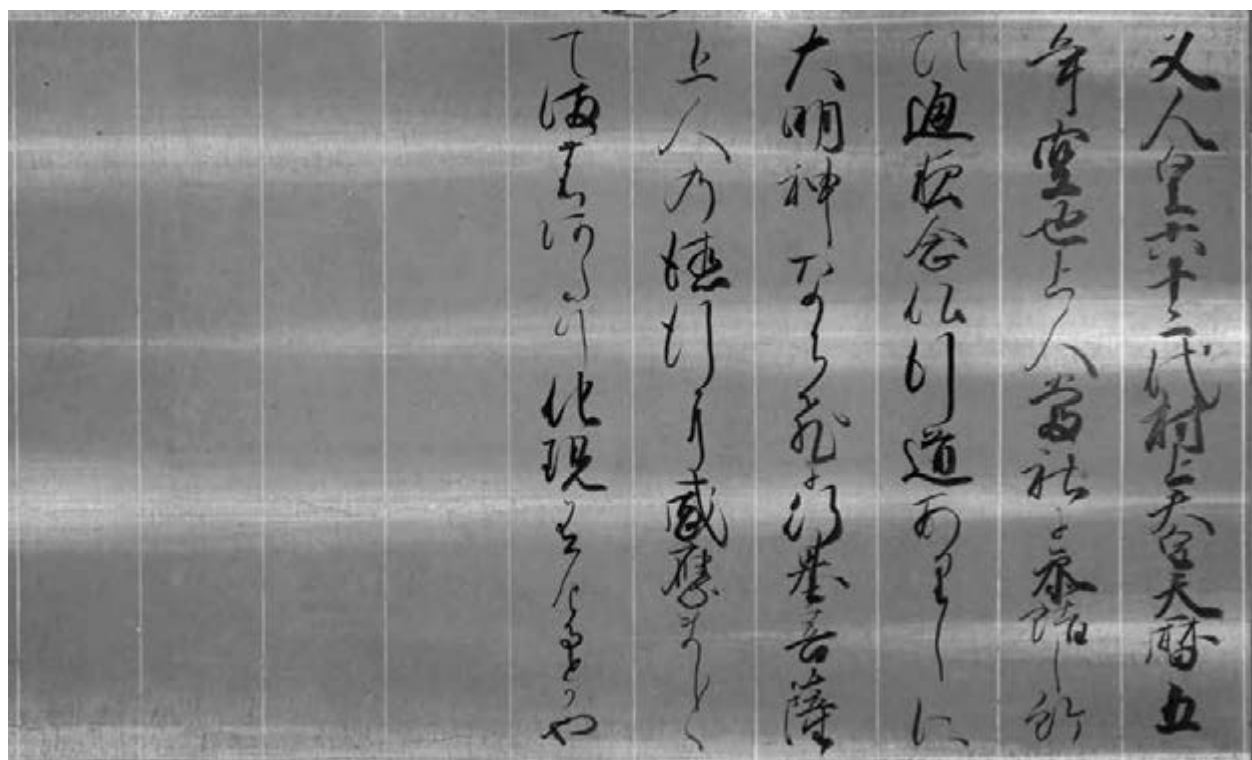
【図2-20】下巻・第三段 万里小路淳房



【図 2 -21】 下巻・第四段 久我通誠



【図 2 -22】 下巻・第五段 裏松意光



【図 2-23】 下巻・第六段 梅小路共方



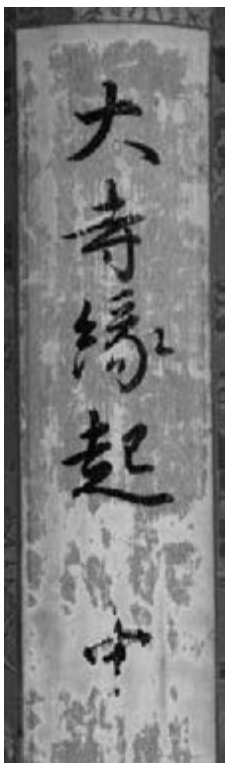
【図 2-24】 下巻・第七段 石井行豊



【図 2 - 25】 下巻・第八段 一乗院宮真敬法親王

【表】

「大寺縁起」詞書		筆者名 ()内は稿者補足	生没年
上巻	第一段	関白左大臣藤原(近衛)基熙公	1648 - 1722
	第二段	権大納言藤原(中御門)資熙卿	1635 - 1707
	第三段	前権大納言藤原(今出川)伊季卿	1660 - 1709
	第四段	刑部卿源(竹内)惟庸卿	1640 - 1704
	第五段	入道二品(妙法院宮)堯恕親王	1640 - 1695
中巻	第一段	右大臣藤原(鷹司)兼熙公	1659 - 1725
	第二段	前権大納言藤原(烏丸)光雄卿	1647 - 1690
	第三段	前参議藤原(風早)実種卿	1632 - 1710
	第四段	権中納言藤原(持明院)基時卿	1635 - 1704
	第五段	参議右兵衛督藤原(櫛笥)隆慶卿	1652 - 1733
	第六段	参議藤原(穂波)経尚卿	1646 - 1706
	第七段	従三位藤原(萩原)員従卿	1645 - 1710
	第八段	宮内卿藤原(高野)保春卿	1650 - 1712
	第九段	右衛門督平(平松)時方卿	1651 - 1710
	第十段	左衛門督藤原(飛鳥井)雅豊卿	1664 - 1712
	第十一段	右衛門佐藤原(竹屋)光忠朝臣	1662 - 1725
	第十二段	入道二品(青蓮院宮)尊證親王	1651 - 1694
下巻	第一段	内大臣藤原(近衛)家熙公	1667 - 1736
	第二段	権大納言藤原(甘露寺)方長卿	1648 - 1694
	第三段	権大納言藤原(万里小路)淳房卿	1652 - 1709
	第四段	権大納言源(久我)通誠卿	1660 - 1719
	第五段	参議藤原(裏松)意光卿	1652 - 1707
	第六段	従三位藤原(梅小路)共方卿	1653 - 1727
	第七段	従三位平(石井)行豊卿	1653 - 1713
	第八段	入道二品(一乗院宮)真敬親王	1649 - 1706
外題	——	無品常子内親王	1642 - 1702



【図 2 - 26】 外題 (中巻) 常子内親王